
友

カツオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

友

【Nコード】

N0787A

【作者名】

カツオ

【あらすじ】

面白くない人生を送っている亘の家に転がり込むたった7秒しか会っていない人五反田。とテムテム。二人と一匹が繰り広げられる人間コメディ

第一話 記憶無き友（前書き）

とりあえずよろしく

第一話 記憶無き友

チャイムが鳴った。

亘は、誰だ、こんな深夜に！と思いながら玄関に向かった。

亘は埼玉から上京してきた。

28歳だ。今は週刊誌の出版社で働いている。

どうせ、間違えたピザの配達だろうと思った亘は、ドアを開けた。

亘は友達がいらない。

とゆーか、今はいない。

上京する前に親友とお別れの宴会をした。

それ以来、友達はいない。

でも仲間はある。

会社の仲間だ。

おっと、仲間も友達だと思ってる皆さん。

そうですけど、その仲間は亘の家に遊びに行っていない。

亘も、仲間の家に遊びに行っていない。

開けると、まだチャイムを必死に押していた。目も真剣に。

亘は啞然としていた。

今、深夜に大きいリュックとハムスターらしき小屋を持ちながら、真剣にチャイムを押している人が今、目の前にいる。亘は、我慢しきれず言った。

「もう、開いてますよ…」

その男はえっ、って感じで亘を見た。その後、いきなり泣き出して、

「うおおおおお！！会いたかったあ！橋本お」

と膝をつきながら泣いていた。

いわば、泣き叫んでいた。

でも、今は深夜だし、この階には赤ちゃんがいる部屋もあるし、すごく迷惑だ。

「と、とにかく中に入れ。近所迷惑だし」

と言つて亘は、男を部屋の中に入れた。

「んで、名前は？」

「五反田…」

「五反田？オレ、記憶力はいいけど五反田は覚えてないなあ。それより、オレ、おまえと会ったっけ？」

「ひどいなあ、会ったじゃないか」

「いつ？」

「それは、…」

話が長くなるので、じつは、五反田はオレが小さい頃隣だったじいさんの孫、オレをみたのは7秒らしい。

「はあああ！！？7秒？たったの？」

五反田は頷いた。

「い、いや、ふつうは7秒しか会っていない人の家に転がり込むか！？」

「まあ、オレはそんなタイプじゃない」

「なんだこいつー！すげーうぜー！！」

すると、五反田はハムスターらしき小屋からすごく太ったハムスターを出した。

「なんだこれ」

亘は叫んだ。

「オレのたびの友、テムテムだ」

五反田はスマイルを送った。

「なんだおめ」

第一話 記憶無き友（後書き）

読んでくれてありがとう。

第2話 仕事とテムテム

朝になった。亘は起きてスーツに着替えようと思った時、
「やあ、おはよう。私の小さな命を救ってくれたもの」

亘が声が出た方を見ると、五反田の相棒、ハムスターのテムテムが右手を上げてしゃべっていた。

「わああああー!!」

「ほいほ？オレは喋れるんだぜ」

すると五反田がさつと起きて、さつとテムテムを掴んだ。
何か小言を喋っている。すると、テムテムが泣いている。

「そうだ、オレ、調理師免許持つてるんだぜ」

「おお！」

「なんか作ってやるよ」

「さあ、出来た！存分に食べ」

「朝っぱらから中華はなあ」

数々の中華が並べられている。エビチリやタンタン麺。

テムテムがエビチリをうまそうに食っている。

何故かにこやかになっている。

「五反田あー!!これすげーうめえ！おめえ料理の天才だ！」

はすこくうざかったので、ひいた。

亘

「うーん、こらこら！軽蔑するな！やめないと…ちゅーっっっっ
う！（泣いている）」

五反田もとんでもなくうざかったので、テムテムをひいた。

「おおーい！五反田もひいたあ！ちゅーっっっっっっ！」

亘はうわあ、うぜえと思った。

亘は仕事の準備を終えて、椅子に座った。そして、五反田に言った。

「おい、とりあえずここにいていいが、家には出るな。冷蔵庫になんかあるから食え！」

「んなら、小遣いくれ！カードゲーム買っ！」

五反田がなんかくれのジェスチャーをした。

亘は反論した。

「んなら働け！オレの給料だけじゃこのデブハムスターのせいで食費が足りない」

すると、テムテムがしみじみ言った。

「そうだな、よし、五反田！働け！オレの…」

五反田はテムテムを殴った。

五反田はふらふら歩きながらつぶやいた。

「探すなら、飲食店の店がいいな」

すると、超有名レストランが調理手伝いを募集していた。

五反田は走ってそこに入った。

五反田は調理師免許を見せた。

追い出された

が、すぐ戻された。

五反田は、調理手伝いになった。

第3話 自由

亘はすぐ、こんなバカが就職につけるとはと思い、驚いていた。だつて、時給6千円ですよ。

もう、売れっ子ホストですよ。もう不景気どころじゃないね。

テムテム舞ってます。すごくニコヤカです。

「いいぞお、五反田あ。ふひょー飯食い放題だー！」

翌日、五反田の日給8時間働いたから4万8千円です。

テムテム、それ持って逃げました。

亘と五反田が追っていたら、テムテム、叫びました。

「オレにも自由をくれ !!」

テムテム消えました。

テムテムは何しよっかなうってうきうき気分です。10歩ごとに金数えています。

はい、風来しました。金舞ってます。

テムテムが泣きながら追いかけています。

「おい、待て待たなかったらおめーの腸をグチョグチョにしてやる
！」

いや、無理でしょ紙だもん。腸無いもん。

そこに待ってたのは、子供です。

木の枝を持っています。子供がにこーっとしてテムテムを叩きます。
「こら！やめろ。目玉引つかくど」

でも、相手は子供。

いじめるのに精一杯。なんか子供、快感とか言ってます。

テムテム、強引に明日もここに来る約束されました。

もうボロ泣きです。金なんかもうどこ行っただか分かりません。

亘の家に付きました。

エレベータのボタンが届きません。

すると、腕がボタンを、しかも亘の階です。

テムテムは泣きながら上を見ました。子供です。また笑ってます。

「また、会えたね」

エレベータの中では、

「ちゅっつ」

しか聞こえません。

亘の家に子供とテムテムが来ました。

あの子、亘の部屋の隣です。

テムテムの遊び相手、発見しました。

子供ももう毎日がつきつきウオッチングです。五反田も

「よろしく」

と言ってます。テムテム、ただいま最悪の不幸です。

第4話 ドーベルマン

テムテムの遊び相手になった子供は、学校から帰ってきてからは、ドラクエかテムテムです。

ドルマゲス倒してからは、テムテムです。

もう下手したら犯罪になりそうないじめをしました。

子供はもう最高のようです。ストレス解消グッズですね。もう。テムテム、泣いてました。傷だらけです。

「ひでーよお、なおみちゃんだよ」

なおみちゃんを分らない人へ

なおみちゃんとは小学館の週刊少年サンデーのマンガ

「金色のガッシュ」

のなおみちゃんです。主人公のガッシュをいじめる女の子です。

「ハムスターのくせにマンガ読んでんだな」

亘が言うと、テムテムが五反田のバックからマンガをたくさん出した。

「これを読んでる」

「マンガ持てるんだ」

亘は科学のちからはすごいなあと思いました。

今日もテムテムは隣の子供に呼ばれてきました。

「ちゅっつっ！」

亘と五反田は酒を飲んでた。だが、五反田はコーラばかり飲んでる。

亘は不思議に思っただけ聞いた。

「酒、飲めないのか？」

「ああ、バイトに響く」

五反田はコーラを一気のみした。

「なあ、五反田」

「なんだ」

「明日、料理教えてくれ」

「ああ」

すると、どたばたした音が、なんか待てとか言ってます。

亘も五反田も何だっただけ思っている。ドアが開いた。

テムテムです。なんか追われてます。ドーベルマンです。

「助けちゅうう！噛まれ、噛まれ、ミジンコ」

「ぐおお、グルル、ワンワンうおおお！」

「ぎゃちゅうううううううううううう！！！」

ああ、ドーベルマンです。

大家です。このマンション、ペット飼っていいんです。

テムテムとドーベルマンが部屋中走り回ってます。

子供たちも部屋に入ってバカ笑いしてます。

亘と五反田はちよつとが和らいだ。

しかも、五反田も笑ってます。今までの旅の友の事忘れてます。背中噛まれました。

テムテム、泣いています。

五反田と子供はバカ笑っています。はい。犯罪です。動物虐待です。はい。大家登場。子供たち、めちゃくちゃ叱られています。もう、テムテムと一緒にボロ泣きしています。自業自得です。なんか、テムテムを叩いてる奴もいます。

亘は家賃10倍になりました。

「なんで俺までなるんだよ。」 チャイムが鳴りました。亘が出ると、スーツを着ています。

「すみません。私は天皇の秘書になっている者ですが」

天皇の秘書が名刺を見せた。亘は受け取って聞いた。

「何の御用ですか？」

「五反田さんはいますか？」

「いますけど」

すると、いきなり入ってきた。

「勝手に入らないでください」

部屋に入ると、天皇の秘書がやっとやり遂げた感じでひざを付いた。

「やっと、見つけました。五反田さん」

第4話 ドーベルマン（後書き）

次回、最終回

第5話 フリー

「探しました。五反田さん」

亘は何が何だか分からなかった。

こんな喋るハムスターを連れたやけに料理だけうまいバカが、何で天皇の秘書に探されてるんだ？亘はこんがらかった。

「雅子様もお待ちしています」

え ！雅様が待つてる！？一度でも待たせてみたい。

亘は我慢しきれず言った。

「何で！雅様が待つなんて、こいつはなんですか！？」

「天皇付属の調理師です。日本で3本の指に入るぐらい料理はうまいんですよ」

え ！「愛子様の離乳食を作られています」

亘はもう何が何だか分からなかったがだんだん理解できた。だから時給6千円なんだ。

「おお、テムテム様探しました」

「おーす」

「テムテムは何」

「防犯小型ロボットです」

ああ、もういいや。亘はもうあきあきした。

五反田は舌打ちしている。

「オレはもうちょっとフリーなコックがいいんだ！ワンピースのサ
ンジみたいに」

「お願いします！」

秘書は土下座した。亘はすげえと思った。天皇の秘書を土下座
するなんて

「明日、明日行くよ」

「じゃ、今日私、泊まらせていただきます」

亘はため息をした。

秘書は、すごく酒に強かった。しかも、泣き上戸だった。

そして、翌日、秘書は悲鳴をあげた。見ると、置き手紙があっ
た。

「悪い、やっぱりフリー上等！ 五反田 テムテム」

子供たち、泣いてました。

ボロ泣きです。テムテムうとかいってます。ああ。

亘は面白かったなとか思っていました。

亘は残りの人生を面白く生きようと思ってました。

完

第5話

フリー（後書き）

ありがとう

!!!!!!!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0787a/>

友

2010年10月20日16時43分発行